

子どものロールシャッハ反応：把握型の発達の視点から

中京大学心理学部 明翫 光宜^{注1}

Children's Rorschach responses: From the developmental perspective of location choice

MYOGAN, Mitsunori (Department of Psychology, Chukyo University, Yagoto-honmachi, Showa-ku, Nagoya, 466-866)

In the present paper, the author reviews the developmental theories of Rorschach responses and categorizes the developmental models in terms of location choice. Herein, the author proposes that viewing location choice from a developmental perspective is useful for the assessment of cognition and personality.

Key words: children's Rorschach responses, location choice, cognitive development

1. はじめに

近年、児童虐待や発達障害を中心に子どものロールシャッハ反応に再び関心が向けられてきている。それに従い、現代における子どものロールシャッハ反応のサンプルが揃い、さらに年代別または国際的な比較もなされてきている（松本，2003；小川・松本，2005）。

子どものロールシャッハ反応についての重要な知見は、子どものW%が成人よりも高いこと、子どものWは未熟なWで成人のWとは質的に異なることである（Freidman, 1953）。しかし、子どものロールシャッハ法に関する文献的展望（松本，2003）を見ると、1990年代に入り、健常児研究や臨床児童に関する研究が減少していたという点、さらに現在の子どものロールシャッハ研究ではExnerの包括システムの標準データの蓄積に重点が置かれている点があり、子どものロールシャッハ反応について把握型の質的な検討に注目した研究は少なくなっている。被虐待児や発達障害児のロールシャッハ反応を解釈する上で、反応の成り立ちや反応の質的变化を発達の視点から注目していくことは意味があると思われる。そこで、本論では子どものロールシャッハ反応の質的な側面について諸家の知見を整理することで、形態水準評定、ならびにロー

ルシャッハ解釈の基礎的理解の一寄与としたい。

2. 子どもの把握型の古典的研究

ロールシャッハ・テストの質疑段階で、検査者が被検者にまず最初に尋ねるのが領域である。領域とは検査者が被検者に「どこに何を見たのか」を尋ねることであり、被検者の着想と図版との対応、つまり形態水準の評定の基礎となるものである。実際にRorschach自身も、把握型とその形態質を加味して、正常者の全体反応をG+型（W+：一次的全体反応）、統合失調症患者の全体反応をG-型（W-：二次的全体反応）と記述していた（Rorschach, 1921；小沢，1970）。したがって、発達の側面から把握型を注目することが、現実吟味ならびに概念形成の発達の程度をアセスメントすることにつながり、重要であると思われる。

把握型の古典的な発達研究の中で、最も重要な研究はFreidman（1953）、Fox（1956）、およびMeili-Dworetzki（1956）である。

子どものロールシャッハ反応の発達研究で最も知られている研究はFreidmanの発達水準（Developmental Level Score 以下DLとする）の研究であろう。Freidmanら（1953）の研究により、把握様式と形態質の問題が初めて体系的に明らかにされたのである（Table 1）。Freidmanらは、「未分化から分化、統合へ」というWernerによる知覚の発達

注1 m-myogan@cnc.chukyo-u.ac.jp

Table 1 Freidman の発達水準 (注)

Wa (無定型全体反応: amorphous W) Da (無定型部分反応: amorphous D)
プロットの形態が何ら決定的な役割を果たしていない反応で、プロットの色彩のみに基づいている。 (例) I 図版「黒い絵の具」
Wv (漠然全体反応: vague W) Dv (漠然部分反応: vague D)
プロットの漠然とした印象に基づいており、形態要素はいくぶん存在するが、どのような形態でも成立するような性質を持つもの。 (例) II 図版「岩層」
W- (不良形態全体反応) D- (不良形態部分反応)
反応内容は一定の形を必要とするが、プロットの形には沿わないもの。 (例) I 図版「カエル」
DW (作話的全体反応) DdD (作話的部分反応)
一般の定義と同じ。すなわちプロットのごく一部の形態特徴のみを手がかりとして飛躍的に全体に対して反応するもの。
Wm (平凡全体反応: mediocre W) Dm (平凡部分反応: mediocre D)
プロットの輪郭と分割が考慮に入れられ、一定の形態がプロットと一致している。 (例) V 図版「コウモリ」
W+ (結合的良形態全体反応) D+ (結合的良形態部分反応)
個々の部分が結合されて全体を形成し、内容とプロットとの一致度が高い反応。 (例) II 図版「2人の男が酒場で乾杯をしている」
W++ (分節的良形態全体反応) D++ (分節的良形態部分反応)
個々の部分が知覚的に結合され、しかもよく分化された統一的全体へと再構成され、内容とプロットが一致している反応。

(注) これらの基準はさらに発達の高い水準 (High W, HighD), 低い水準 (LowW, LowD) に分類される。

(HighW: W++, W+, Wm)
(HighD: D++, D+, Dm)
(LowW: Wa, Wv, W-, DW)
(LowD: Da, Dv, D-, DdD)

Freidman は、ロールシャッハ図版を分離性図版 (図版 II, III, VII, VIII, X), 非分離性図版 (図版 I, IV, V, VI, IX) に2分している。W+反応は分離性図版においてのみスコアされ、Wm反応と W++反応は非分離性図版においてスコアされる。

理論に基づいて、統合失調症患者の知覚的退行の問題などを含めた組織的な研究を行った。その後、Freidman のカテゴリーを数値化して全体的な認知発達を捉えようとする研究が行われるようになった。DL を数値化する研究では、特に Becker (1956), Wilensky (1959) の overall DL scores が有名である。overall DL scores とは各 DL カテゴリーに1点から6点の重み付けをした得点を与えて、ロールシャッハ・プロトコルの各反応に対するそれらの得点の平均値を算出することによって、被検者の総体的な発達水準を知ることが出来る尺度である (辻・倉戸, 1993)。

Freidman の DL は把握様式の発達の変化をかなり明確に捉えられる点と一貫して知能検査と有意な相関を持つ研究結果が得られる点で、多くの研究者に用いられてきた。発達の変化に関する研究では、現在世界的によく用いられている包括システムでも、Freidman の DL をさらに簡略化して、発達水準 (Developmental quotient: DQ) として採用している。

Freidman のカテゴリーは問題点もある。それは、不合理な、あるいは無理な結合性を持った全体反応を捉えるカテゴリーに欠けていることである (小沢, 1970)。子どものロールシャッハ反応の中には、W 反応への志向性が強すぎてプロットの適合性を犠牲にしても W を出そうとする構えに基づいた反応がよく産出される。この点に関しては次に述べる Fox (1956) の「年齢パターン (Age pattern)」が大いに参考になる。

Fox (1956) は、子どものロールシャッハ反応が通常のスコアリングシステムでの形態水準評定が可能になるまで、子どもの概念形成に応じて3つの段階を経ることを示した (Table 2)。Fox の研究の重要な貢献は、第一に従来統合失調症患者に出現するとされていた Rapaport の Deviant verbalization (逸脱言語表現) の一部が子どものロールシャッハ反応に見られることを示したことであり、第二にそれらの反応は統合失調症患者に見られるような自閉的思考を示すものではなく概念形成の発達過程を示すことを明らかにしたことである。Fox の知見は、児童臨床におけるロールシャッハ解釈において、精神病理学的視点を発達臨床心理学的視点から捉えなおすことを可能にしたと言える。

反応領域の発達の様子をさらに詳細に分析した研究に Meili-Dworetzki (1956) の研究がある。

Meili-Dworetzki はゲシュタルト心理学および、Claparède, E や Piaget, J の発達理論に基づき、ロールシャッハ図版に加えて 6 枚の曖昧な二重絵を用いて、把握の発達に関する理論を展開した。

Meili-Dworetzki によれば、把握型の発達はだまかに次の 3 段階を経ていくという。すなわち、それは(1)未分化な全体知覚 (Globalization あるいは Syncretism), (2)分析的知覚 (Analysis), (3)統合的知覚 (Synthesis) である。ロールシャッハ・テストのスコアでは、 $W \rightarrow D \rightarrow (W+D)$ と表現される。Meili-Dworetzki はこのような変化に至る要因を精神構造の柔軟性 (flexibility) または可塑性 (plasticity) の発達であるとした。さらに Hemmendinger (1953) は、Meili-Dworetzki の仮説を追試するとともに、Freidman のカテゴリーにおける年齢的な推移を検討した。

Meili-Dworetzki の知見は、分類が複雑であるため Freidman のカテゴリーのように数値化が難しいものの、把握の発達の質的な変化が詳細に分類さ

れており、ロールシャッハ反応から幼い子どもの知覚のあり方を詳細に知ることを可能にした (Table 3)。

この Meili-Dworetzki の考え方は、日本では大阪大学式技法 (辻, 1997) の把握型の解釈学に応用されている。辻 (1997) は、Hemmendinger や Meili-Dworetzki, 辻・浜中 (1958) の研究を概観して、「最初の学習姿勢の定着の時期に一致して、W%の最低期、言い換えると相対的に最も部分指向が強い時期があるという法則 (辻, 1997, p18)」を述べた。

さらに Hemmendinger は、Freidman のカテゴリー (HighW, HighD, LowW, LowD) で把握型を分類しているが、この W%が最も低い値になる時期に一致して、HighW と HighD が急速に増加し、LowW, LowD とが減少する結果を示している。同様に、辻・浜中 (1958) は、W%が最も低値になる時期での基礎形態水準の動向は、F-%ではそれまでの高い値から比較的急速に低下し、小学

Table 2 Fox (1956) の年齢パターン

① The Magic-Wand Persevation (2-4 歳) (魔法の杖のような保続)
<p>インクプロットのしみにに対して子どもが偶然に何か答えたとき、検査者が答えたことに対して承認すると (子どもが承認・許容されたかと思うと)、残りの図版でも機械的にその答えを繰り返す種類の反応である。子どもはまだ概念が形成されていないのでプロットという現実に対して現実吟味の力もなく反応し、それが検査者に承認・許容されると、それに支えられて行動する。その際に、子どもは図版とはほとんど関係なく反応しているので、図版との距離は増大している (空井, 1991)。Klopfer 法の形態水準評定では -2.0 あたる (内田, 1996)。</p> <p>(例) I 図版に対して「ワンワン」と答えて、それが承認されたかと思うと、他の図版でも「ワンワン」と反応し続ける。</p>
② The Confabulation (3-5 歳) (作話反応)
<p>いわゆる DW 反応で、部分を根拠にして思いついた概念を、全体に過度に一般化してしまう反応である。図版の現実が過大に取り入れられているようになるという、いわば距離の喪失が起きている (空井, 1991)。しかし発達のみにみれば、The Magic-Wand Persevation と比較してプロットの一部ではあるが適合している部分も見られ、現実吟味の芽生えと理解することができる。Klopfer 法の形態水準評定では -1.5 あたる (内田, 1996)。</p> <p>(例)「ネコ」と反応し、質疑段階で微小な部分を指し、「ここにネコのヒゲがあるから」とのみ言う。</p>
③ The Confabulatory Combination (4-6 歳) (作話的結合反応)
<p>いわゆる Fabulized combination である。DW 反応では一ヶ所だけであった形態の一致が数ヶ所に出てくる。しかし、それらの統合性を考えることなく平気で反応する場合である (空井, 1990)。発達のには、The Confabulation と比較してプロットとの一致点が増え、プロットと自分の反応との適合に努力が見られ、現実吟味が成長したと理解することができる。図版の距離の観点からは、DW 反応よりも距離の喪失の度合いが弱くなったと考えることができる。Klopfer 法の形態水準評定では -1.0 あたる (内田, 1996)。</p> <p>(例) I 図版で「ネコ」と反応し、納得のいく細部の説明をするが「白いのは目が 4 つ」と反応する場合。</p>

校年代における低値での横ばいに変化すること、また F+% では小学校高学年へ向けて急速な立ち上がりを見せるが、その立ち上がり点は W% が最も低値になる時期と一致していることに注目した。

この時期の反応の特徴は、識別条件（その条件があればそのものと決定し、他のものを排除できること）のもとに、プロットの外輪郭形態（F）と反応概念との明確な一致をはかること（F+）を最も重要な反応決定の条件とする姿勢の定着を示している⁽¹⁾。この時期の把握型は Table 3 にある Meili-Dworetzki の分類では、「分析的知覚」に該当する。

このことは、「発達的にみられる全体から部分への移行は、対象を正確に把握する力の定着と並行する（辻, 1997, p19）」こと示し、辻（1997）は、最初の学習姿勢が定着する時期（就学時）に一致してみられる、部分把握と本質的な親和性をもつ対象の正確な把握の仕方を「初期集約的把握型」と呼んだ。「初期集約的把握型」とは、子どもが発達的に初めて正確な対象把握に、精神的な能力を集中させる時期にみられる把握型という意味をさす（辻, 1997）。正確な対象把握とは、ロールシャッハ反応ではインクプロットの領域のうちどの部分までが反応に属し

Table 3 Meili-Dworetzki の把握型の発達

1 原始的・全体的知覚 (Globalization あるいは Syncretism)	
① The blot as seen as a "Figure on Ground"	プロットを単に「地の上の図」と受け取る知覚であり、「魔法の杖の保続 (Fox, 1956)」と呼ばれる固執反応を引き起こしやすい。各プロット間の相違にほとんど気がついていない反応で、最も未熟な反応である。つまり外輪郭形態がほとんど機能せず、被検者にとってプロットは「そこに何かがある」という構造として機能しているだけである（辻・福永, 1999）。
② Vague W's Based on Shading and White Space	濃淡と空白部分に基づいた曖昧な全体反応で、Binder の情緒的特徴を伴わない陰影反応 (Hd)、Klopfer の KF や c F、Racker-Ovsiankina や Rapaport の統合失調症患者のロールシャッハ反応に現われる漠然全体反応に対応する。まだ外輪郭形態がほとんど機能せず、ぼんやりしているが、被検者はプロットの濃淡という特徴を用いている。
③ Schematic W's Based on the Outline of the Blot	非常に単純で図式的な全体反応。この反応は抽象化には成功しているが、材料の批判的明細化が欠けている点において、原始的な図式的全体把握といえる。プロットの輪郭に基づいた知覚であるが、大まかな構造で捉えられている（辻・福永, 1999）。
④ Confusion of Part and Whole	Fox の The Confabulation にあたる。この反応を示す時期の子どもの知覚は、プロットの中でも目立った一部分へと移行する。しかし、そのような個別にプロットの一部を認知したにも関わらず、子どもはなおも全体に反応をする。この反応は、1つの反応において外輪郭形態の一部は明確に捉えられている（一致している）が、他の相当広い部分での形態特性を考慮しない反応である。つまり、一つの反応概念の中で明瞭に見ている部分とそうでない部分があり、被検者の認知条件が均質ではない反応である（辻・福永, 1999）。
2 分析的知覚 (Analysis)	
① 原始的な部分知覚	未分化な全体知覚から部分知覚への移行期に生じ、Dd 反応としてその姿を現す。顕著に目立つ部分への着目が特徴であり、特に突出した部分に注意が引かれ、木、棒、足などの反応が多く産出される。中央線や空白部分、点などの着目も多い。最も高い出現頻度を示すのは5-7歳であり、知覚が運動性 (motility) や触感 (touch) と結びついているのが特徴である。
② 優れた分析知覚	原始的な部分知覚は、全体と部分との関係が安定することによって、形態質の良い D 反応の段階へと移行する。しかし、年齢によって選ばれる D 領域は異なる。例えば、III 図版の「人間」や「リボン」、X 図版の褐色領域の虫は早い時期から出現するが、II 図版の「動物」や IV 図版の中央下部の「動物の頭」は10歳以下ではわずかに出現するのみである。
3 優れた全体知覚 (Synthesis)	
発達的にみて最も高い段階にあるこの知覚様式は、優れた部分知覚とともに、正確な知覚過程を反映するものである。	
① 両側対象型の全体反応	
② 結合的全体反応	
③ 図式的な優れた全体反応	
④ 印象に基づいた全体反応	

ているのかの限界を明らかにする対象の外輪郭形態を、明確な識別性でとらえて、そうでないものと区別が出来ることである。このことは、被検者が対象の独立性を認知することが出来ることにもつながる。この把握型の臨床的意義として、被検者が対象の独立性とその限界との関係に気づくことは、その認知している主体（被検者）が限界を持っていること、つまり独立していることに気づくことと表裏をなす関係にあるから、認知主体（被検者）の自我境界の形成、個体化につながっている（辻, 1997）。

「初期集約的把握型」とは、識別条件のもとに、プロットの輪郭形態（F）と反応概念との明確な一致をはかること（F+）を最も重要な反応決定の条件とする姿勢の定着を示す把握であった。この正確な対象把握が発達的にまだ定着していない時期の把握を「初期集約的把握型以前の把握型」という。「初期集約的把握型以前の把握型」の代表例として、Meili-Dworetzkiの原始的・全体的知覚の4種類の反応が挙げられている（Table 3）。辻（1997）はこれらの反応の共通点に着目し、①「用いられた領域の全体、あるいは無視できないかなりの広さにおいて、輪郭形態が機能していないこと」、②「多少なりとも機能している輪郭の部分と、していない部分とを区別していない」の2点に要約している。この時期の把握型の臨床的意義として、初期集約的把握型で述べたような自我境界の形成や個体化の障害、または不全を示しており、正確性—不正確性の区別（何が本質か、あるいは重要かを見分ける力を基本とする）という命題も定着せず、未分化と安易さを伴った形で周囲の状況によりかかり、取り込まれている状態といえる（辻, 1973; 1997）。

初期集約的把握型が定着してくると、通常は次第に全体反応が増加してくる。そのとき主流になってくるのは、Meili-Dworetzkiの分類で「優れた全体知覚」にあたる、Claparède, Eのいう「部分の有意義な利用を伴った全体の総合的な再構成」である（辻, 1997）。つまり、RorschachがG+型（W+：一次的全体反応）と表現した良形態の全体反応と良形態の結合全体反応が出現し始める。辻（1997）は、この時期の反応を「初期集約的な把握以後の全体反応」と呼んでいる。この良形態の全体反応であるが、良形態反応（F+）を出すためには、以下の条件が必要である。

良形態反応を産出するためには被検者の記憶像（エングラム）が多く求められる。しかし、インク

プロットは漠然図形であり、インクのしみ以外の何ものでもありえないから、当然被検者の記憶像とは細部の不一致が多くあり、決して完全に一致することはない。そこで、そういった条件の中、識別的な条件の重要性をふまえて、重要なポイントを選び出し、多くの不一致がある中で押さえておくべき一致点を押さえ、その他を不問にするという、被検者の主体性あるいは自我の能動性が必要とされる（辻, 1997）。この良形態反応を産出する場合、部分反応よりも全体反応の方が反応とプロットの一致点・不一致点について考慮すべき点が多くなるため、初期集約的把握型の時期では、全体反応を良形態で捉えきることが難しく、部分反応が多くなるのであった。しかし、この時期のロールシャッハ反応は、発達に伴い識別的な形態でみられる部分は広がりをもせるとともに、状況（図版）からのフィードバックを認知する力^②という正確な対象認知とは次元の異なる力も展開し、定着するようになる。

辻は、Meili-Dworetzki, Hemmendingerの知見に対して、外輪郭形態をキーワードに、(1)未分化な全体知覚（GlobalizationあるいはSyncretism）、(2)分析的知覚（Analysis）、(3)統合的知覚（Synthesis）の把握の質的な変化に対して詳細な反応の構造的理解を述べるとともに、それぞれの段階の反応における臨床的意義を考察している。辻の理論は、子どものロールシャッハ反応は、プロットの輪郭を全く使わず「そこに何かある」という用い方から、プロットの陰影・輪郭を大まかに使う段階を経て、ごく一部の突起部分であるが輪郭形態を用いるようになり、識別性の条件のもとに外輪郭形態を用いた部分反応・全体反応になっていくという発達の質的な変化を見事に描いている。

3. 近年の子どもの把握型の知見と筆者による把握型の整理

また近年、Leichtman（1996）は、子どものロールシャッハ反応の知見を包括して、"The Rorschach"と呼ばれる「子どもが検査の教示を理解し、異なった図版で異なった反応をし、質疑段階でも標準的な方法で記号化や解釈が出来る段階」に至るまでの発達の変化をまとめた（Table 4）。

Leichtmanは、ロールシャッハ・テストにおいて数量的分析による解釈が可能になる時期までの反応の質的な変化を明確に記述している。他の研究者が

あまり言及していない対人関係の発達も詳細に記述しており、興味深い。

以上、主要な子どものロールシャッハ研究者の発達理論を概観してきた。以下、筆者は上記の子どものロールシャッハ研究を形態水準とを加味しながら整理を試みた (Table 5)。

発達の未熟な反応から成熟な反応に至るプロセスを追っていくことにしよう。最も原始的な反応である Perseveration では、外界 (図版) に対して反応する力を示していると考えられることができる。さらに発達が進むと、図版という現実の特徴を大まかではあるが捉えようとする ("Vague W's Based on

Table 4 Leichtman の知見

<p>Stage I : Perseverative Approaches to the Rorschach</p> <p>広汎に見られる保続型で、いわゆる「魔法の杖の保続」。Klopfer と Margulies (1941) が述べているように、子どもは I 図版で曖昧に捉えた特徴から第一反応が生じて、残りの図版の構造をまったく無視して、それぞれの図版に対する反応として、同じ言葉を単純に繰り返す (p4)」。その反応は、インクプロットの特徴をほとんど対応していないので (距離の増大)、検査者はどこから来たのか困惑する。</p> <p>対人関係の特徴 (Toys and Associative Play)</p> <p>成人が暗黙の了解として共有している検査者-被検査者の役割に対して無頓着である。子どもは検査に協力的であるが、次のときは協力的でないなどその場限りである。またこの時期の子どもは、図版を玩具として扱う。検査者は、子どもの検査への集中を維持すること、図版を玩具に変化しないようにするのを防ぐことが難しい場合が多い。例えば Ford (1946) ではこの時期における子どものロールシャッハ状況の特徴を以下のように述べている。</p> <p>(例)「図版を触る」、「図版を叩く」、「図版のにおいをかぐ」、「図版にキスをする」、「テーブルから落としたり、床に投げたりする」、「図版をあらゆる方向からみるだけでなく、図版の裏を見ることもある」など図版の扱いに没頭する。</p> <p>移行期 (Partial Perseveration)</p> <p>保続型に変化が起こる。全ての図版に同じ反応をする代わりに、(1)特定の図版を拒否する、(2)ほとんどの図版に保続を示すが、2-3 枚の図版では新しい反応を示す。(3)残りのインクプロットでは保続された概念の使用を正当化する特徴を探ることがみられる。</p>
<p>Stage II : Confabulatory Approaches to the Rorschach</p> <p>検査者も検査実施が適用と感じ、子どもに検査をしやすくなる段階である。この段階に入ると、検査状況の様子とロールシャッハ・プロトコルに変化が起こる。具体的には、検査状況では、子どもが最も基本的な形で質疑段階に取り組むことができるようになる。しかし、ロールシャッハ・プロトコルとしては、まだ記号化できる反応になるまでの段階までは達していない (Klopfer は ? マークの伴う反応と述べているし、Ames は検査者の直観に頼らざるを得ない反応と言っている)。</p> <p>保続は次第になくなり、各図版に様々な反応が与えられるようになる。しかし、これらの反応は作話の全体反応の特徴を持つような作話形式の概念形成を表している。この段階では、反応過程の「知覚面」と「連想面」のバランスを取る代わりに、インクプロットは被検査者の主観的過程を発進させている。図版の何らかの側面は反応過程を始めさせるが、被検査者はすぐ刺激とはほとんど無関係な思いつきや空想にとらわれる。</p> <p>対人関係の特徴 (Symbolic Play)</p> <p>この時期に入ると、子どもは次第に検査を規則に従って受け取り始める。しかし検査施行の際には以下の点に注意が必要である。(1)子どもは社会状況に対して極端に敏感になり、検査者を親しい人物と捉える。(2)検査者は、子どもに図版で遊ぶことに意味が無い事をわからせたり、注意散漫になるのを防いだりするために図版の使用を制限する。(3)検査者は、子どもの不満、不信感、退屈さを処理したり、検査に伴う記憶の問題を克服するために、図版を伏せた後、あるいは反応を終えた後に質疑段階に入る。(4)検査に対して子どもの関心を維持し続け、過度の不満を避けるために質疑段階には制限が必要である。(5)子どもの反応は、必要な決定因の言語指標に欠けているので、記号化の際には共有された検査状況での文脈に対する検査者の感受性に大きく頼る。</p> <p>移行期</p> <p>(1)検査の施行は依然として困難なものの、検査の際に検査者が直面する問題はずっと小さくなる。(2)反応数や部分反応の数が段階的に増加する。(3)「作話的結合反応の段階」。反応の適合性はまだ十分満たしていないが、2つの部分を用いるようになる。</p>
<p>Stage III : The Rorschach</p> <p>ロールシャッハ法が「ロールシャッハ法」になる段階。この時期になると子どもは、ロールシャッハ課題を論理的に理解できるようになり、検査者は記号化が可能となるような質疑が出来るようになる。つまり、質疑段階でも標準的な方法で信頼のある記号化や解釈が出来る段階に達する。</p> <p>第二段階で圧倒的だった作話様式は、「知覚面」と「連想面」がよく統合された反応に変わっていく。これまで、子どもに特徴的なロールシャッハ反応とされてきた Confabulation が、精神病理の可能性を示唆する指標へと変わっていく。</p>

Table 5 子どもの反応の質的発達と心理学的意味

反応の種類	反応の構造	心理学的意味
<p>Perseveration</p> <p>「魔法の杖の保続 (Fox, 1956)」と呼ばれる固執反応で、最も未熟な反応である。</p> <p>↓</p> <p>↓</p> <p>Partial Perseveration</p> <p>全ての図版に対する保続ではなく、いくつかの図版で何か特徴を探し始め、いくつか新しい反応も産出する。</p> <p>① Vague W's Based on Shading and White Space</p> <p>濃淡や空白反応を用いた漠然とした反応。(例) 雲, 泥水</p> <p>② Schematic W's Based on the Outline of the Blot</p> <p>大まかな図式的な全体反応</p> <p>↓</p> <p>Confabulation</p> <p>部分を根拠にして思いついた概念を、全体に過度に一般化してしまう。DW, DdD</p> <p>↓</p> <p>↓</p> <p>↓</p> <p>↓</p> <p>① D→W Dd→D</p> <p>Confabulation のように概念とプロットの不一致部分が顕著ではないが、プロットの目立った部分に引き付けられて、反応産出してしまふ。</p> <p>↓</p> <p>② The Confabulatory Combination</p> <p>いわゆる作話性結合反応。部分、部分の認知は適切でありながら、統合がうまくいかない段階。</p>	<p>プロットを単に「地の上の図」と受け取る知覚で、各プロット間の相違にほとんど気がついていない反応。図版にほとんど対応していないので形態水準はつけられないような反応 (Klopfer の形態水準では-2.0)。</p> <p>↓</p> <p>↓</p> <p>各プロット間の相違に気づき、プロットの特徴にあった反応概念を探し始める。しかし、本質的なものは何かという認識には至らない。</p> <p>① 濃淡や空白という大まかな特徴を捉え始める。しかし本質的なものである形態を捉える段階に至っていない (Klopfer の形態水準では 0.0)</p> <p>② ①の形態不確定概念から形態確定概念へと処理水準を上げることが出来る。プロットの特徴の中でも重要な形態に注目し始める。しかし、かなり大まかな混沌とした見方である (Klopfer の形態水準では-1.0 にあたる)。</p> <p>↓</p> <p>形態の一部は明確に捉えられているが (一致している)、他の相当広い部分での形態特性を無視した反応である。つまり、一つの反応概念の中で明瞭に見ている部分とそうでない部分があり、被検者の認知条件が均質ではない反応である (辻・福永, 1999)。形態水準は-となる (Klopfer の形態水準では-1.5 にあたる)。</p> <p>↓</p> <p>↓</p> <p>↓</p> <p>↓</p> <p>① D→W, Dd→D に関しては、Confabulation のように形態特性を大幅に無視したものではないが、そこに働いているメカニズムはほぼ同じ (Klopfer の形態水準では-0.5 か 1.0 にあたる)。</p> <p>↓</p> <p>↓</p> <p>② The Confabulatory Combination は、部分領域において明確な識別条件にて形態知覚が可能であることを示しており、D→W, Dd→D よりは認知の発進が進んでいるといえる (Klopfer の形態水準では-1.0 にあたる)。</p>	<p>被検者は、検査状況で何かを要求されていることや図版に何かあるという理解がある。しかし、図版に対する反応ではなく、状況に対して反応する。自分の役割の認知が未分化であり、自己評価を維持するために置かれた状況に対して積極的に関わろうとする心性が背景にある (Halpern, 1956)。</p> <p>↓</p> <p>依然として未分化な認知のまま環境に寄りかかり、取り込まれるが、環境を知覚する力が芽生えていると思われる。能動性-受動性という観点から①と②の心理学的意味は以下のような違いがあると思われる。</p> <p>① 状況の大まかな特徴を捉え始める。周囲からの情報を受け取る力が芽生えたという受動的な知覚の段階。</p> <p>② 未分化な段階であるが、状況の特徴の中でも本質的なものを見つけようとする。能動的な知覚の芽生え。</p> <p>↓</p> <p>現実に目が行くが、様々な状況の中で、目立った一部分のみに引き付けられ、全体として適切かどうかという比較検討が十分になされないまま行動してしまう。全体からみた状況や文脈の理解は、まだ困難だといえる。しかし、一部分ではあるが確かに適切な認知が芽生えている。この時期までは Piaget の認知発達理論での同化 (自分の枠組みに外界を取り込む機能) が優性な時期であり、外界にある現実よりも、自分の内的な枠組みや欲求が判断の決定因となっていると思われる。</p> <p>↓</p> <p>① Confabulation からの移行期にあたる。D→W, Dd→D の方が、より全体の状況にあった理解・行動が可能になってくる。距離の観点から言えば、Confabulation では、些細な一部に極端に引き付けられているが (距離の喪失)、D→W, Dd→D は距離の喪失の度合いが緩くなったといえる。</p> <p>↓</p> <p>Piaget の認知発達理論では調節 (外界に合わせて自分の枠組みを変える) が優性な時期に入り (Fox, 1956)、② D→W, Dd→D よりも部分領域の認知は機能的に働いている。しかし、現実の状況に拘束され、必要なものとそうでないものとの取捨選択といった主体的な対応が出来ない。</p>
<p>Dd, D の良形態反応が増える。</p>	<p>初期集約的把握型の段階 (Klopfer の形態水準では 1.0 あるいは、1.5 にあたる)</p> <p>形態水準の+の反応が出始める。</p> <p>P 反応および、包括システムでは、FQo レベルの反応が増える。</p>	<p>正確な対象認知の志向性と状況理解で取捨選択できる自由性の獲得の芽生え。</p>
<p>D, W の良形態による統合反応が増える</p>	<p>初期集約的把握型以後の把握の段階 (Klopfer の形態水準では 1.0 あるいは、1.5 にあたる。さらに明細化により Credit が加算される)</p> <p>ただ図版の特徴を用いた明細化ではなくて、反応と図版の一致している重要な部分を選択し、そうでない部分とを区別し、反応を決定できる。つまり、反応と図版との折り合いがついた FQ+が増加する。</p>	<p>対象認知の正確性の獲得と自分にとって必要な情報を取捨選択できる自由性の獲得に加えて、周囲からのフィードバックを認知することも可能となる段階 (いわゆるメタ認知能力が展開し始めていると思われる)。</p> <p>処理困難状況において生じる葛藤を保持できるようになる。つまり、現実と自分の欲求や都合との折り合いがつけられるようになり、葛藤の解決につながる。</p>

Shading and White Space", "Schematic W's Based on the Outline of the Blot")。

それまでの形態不確定概念のような処理水準の低いぼんやりとした見方ではなく、形態確定的概念でプロットを見ようと努力する。しかし、認知の力がまだ追いつかず結果としてDWやD→Wのように被検者の認知がプロットに行き渡らず、プロット的一致・不一致が不問にされたまま反応がなされてしまう。前の段階よりは形態水準が低く反応となるが、ここでの発達の意味としては、より正確なもの・一致している部分を見ようとしたという点が注目される。この点に関しては眞砂・松島(1991)の「子どものロールシャッハ反応は統合と分化を繰り返す」という記述とも重なる。

認知の発達が進み、プロットの部分領域を正確に認知できるようになると、The Confabulatory Combinationの段階に至る。この反応は、反応に必要なプロット・不必要なプロットの取捨選択が十分になされないまま反応産出されることにある。この段階を経て、ようやく初期集約的把握型の段階に入る。この段階に入ると、対象を正確に認知することに成功するようになり、初期集約的把握型以降の把握型のような主体性の獲得に至る。

このように、把握の種類1つ1つには異なる心理学的意味が伴っている。したがって、検査者は、被検者の把握型がどの程度発達しているかといったことやどんな特徴の把握型がプロトコルの中で優位になっているかを査定することで、臨床心理学的援助に役立つ情報が得られるのではないだろうか。

4. まとめにかえて

現在のロールシャッハ・テストは、精神疾患群のロールシャッハ反応の研究知見から解釈の基準値が設定されているため、どうしてもどの精神疾患群に該当するかという病理性の検出に目が向きやすい。検査者は、心理検査から被検者のパーソナリティを査定し、臨床心理学的援助の方針を立てていくが、その際に被検者の反応の成り立ちを丁寧に検討することで、被検者を取り巻く環境へのアプローチの仕方を検査者が共感・追体験することができる。そのアプローチが、ロールシャッハ・テストの原点でもある形式性の側面にあたる。本論で整理したロールシャッハ反応の発達研究は、この形式性の一側面にあたる。

特に近年、児童虐待や発達障害など児童臨床の領域においてもロールシャッハ・テストが多く使用されるようになってきている。形態水準が低いから現実吟味の障害と即断するのではなく、形態水準が低くなった理由を反応産出過程上に求めることで臨床心理学的援助の方向性が見えてくると思われる。把握型の発達の視点は、反応産出過程上の特徴を理解する1つの視点であると思われる。今後、事例研究で具体例を示しながら考察を進めていく予定である。

謝 辞

ロールシャッハ・テストの発達理論をご教示いただきました東亜大学大学院総合学術研究科の内田裕之先生に深く感謝を申し上げます。

注

- (1) 被検者は、図版の材料である形態と色彩を用いて(手がかりに)、自分の記憶にある記憶像(エングラム)とインクプロットとの比較検討の作業を経て反応を産出していく。より良い反応を産出するためには、多くの記憶像の蓄積が求められる。混乱を起こさずに記憶を増加するためには記憶条件の識別性(例えば人間を反応する場合、ある条件があれば人間と反応し、他のものを排除できるもの)が重要となる。その際の具体的な事物の識別性としては、輪郭形態は決定的な位置を占めるという(辻, 1999)。
- (2) 初期集約的把握型の時期では、部分反応が多く産出される時期であることはすでに述べた。この時期のもう一つの特徴として被検者が反応した部分反応を集合させると、ちょうどインクプロットの全体になる法則がある($\Sigma | D | = W$)。この法則のメカニズムとして、辻(1997)によると、ロールシャッハ・テストの「これは何に見えるか」という問いの「これ」は、原則的にその全体(W)である。しかし、媒体となるインクプロットが漠然図形のために、「これ」=「全体(W)」という規定が弱められ、相対化されているとはいえ、「これ」=「全体」というロールシャッハ状況での枠は相対的に生きている。それゆえ、この時期の子どもは、部分反応を産出する一方で、状況全体に対する対応の欠損を感じ取り、それに不全感を持って可能な部分反応の繰り返しで補うのである。これは全体からのフィードバックをキャッチする力の芽生えと考えられている。

参考文献

- Becker, W, C 1956 A genetic approach to the interpretation and evaluation of the process reactive distinction in schizophrenia. *Journal of Abnormal and Social Psychology* 53, 229-236
- Friedman, H 1953 Perceptual regression in schizo-

- phrenia: An hypothesis suggested by the use of the Rorschach test. *Journal of Projective Techniques & Personality assessment* 17, 171-185.
- Fox, J. E. 1956 The Psychological Significance of Age Patterns in the Rorschach Records of Children. Klopfer, B. (ed.) *Developments in the Rorschach Technique Vol II: Field of Application*. Harcourt, Brance & World, 88-103.
- Ford, M 1946 *The application of the Rorschach Test to Young Children*. Minneapolis; University of Minnesota Press.
- Halpern, F 1953 *A Clinical Approach to the Children's Rorschach*. Grune & Strattoninc, New York. (本明寛監修, 富田正利, 松本忠久訳 1974 児童臨床のためのロールシャッハ診断. 実務教育出版)
- Hemmendinger, L 1953 Perceptual organization and development as reflected in the structure of Rorschach test response. *Journal of Projective Techniques & Personality assessment* 17, 162-170.
- Klopfer, B & Margulies, H 1941 Rorschach reaction in early childhood. *Rorschach Research Exchange*, 5 1-23
- Laichtman, M 1996 *The Rorschach: A Developmental Perspective*. The Analytic Press
- 眞砂美紀・松島恭子 1991 幼児のロールシャッハ反応－発達の視点から試みた幼児の知覚分析. 大阪市立大学生活科学部紀要 第39巻 243-253
- 松本真理子 2003 子どものロールシャッハ法に関する研究－新たな意義の構築に向けて. 風間書房
- Meili-Dworetzki. 1956 The Development of Perception in the Rorschach Klopfer, B. (ed.) *Developments in the Rorschach Technique Vol. II: Field of Application*. Harcourt, Brance & World, 105-176
- 小川俊樹・松本真理子編 2005 子どものロールシャッハ法 金子書房
- 小沢牧子 1970 子どものロールシャッハ反応. 日本文化科学社
- Rorschach, H. 1921 *Psychodiagnostik-Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungsdiagnostischen Experiments (Deutenlassen von Zufallsformen)*. 9 durchgesehene Aufl. (Iste Aful. 1921) (Hans Huber 1972). 鈴木睦夫訳 1998 新・完訳精神診断学付 形態解釈実験の活用 金子書房
- 空井健三 1990 ロールシャッハ・テスト. 土居健郎編 異常心理学講座8－テストと診断－ 101-110
- 空井健三 1991 Deviant Verbalization について：距離による考察. 空井健三 臨床心理学の発想：アセスメントの効用から諸領域へ. 誠信書房. 67-81
- 辻 潔・倉戸ヨシヤ 1993 ロールシャッハ・テスト Freidman 法発達水準スコアの妥当性の研究－知能評価における Klopfer 法形態水準評定との比較を中心に. 大阪市立大学生活科学部紀要 41 85-91
- 辻 悟 1973 投映法. 懸田克躬編 現代精神医学体系 VI-A1 精神科診断学 Ia 中山書店 p173-293
- 辻 悟 1997 ロールシャッハ検査法－形式構造解析に基づく解釈の理論と実際 金子書房
- 辻 悟 1999 性格検査 (Rorschach テスト). 松下正明編 臨床精神医学講座 16 巻 精神医学的診断法と検査法 中山書店 p128-137
- 辻 悟・浜中薫香 1958 児童の反応. 本明寛・外林大作編 心理診断法双書 ロールシャッハ・テスト 1 中山書店. 271-348
- 辻 悟・福永知子 1999 ロールシャッハ・スコアリング：阪大法マニュアル. 金子書房
- 内田裕之 1996 ロールシャッハ・テスト思考言語カテゴリーの再検討 (序報). 「心理臨床」名古屋大学教育学部心理教育相談室紀要 第11巻. 27-37
- Wilensky, H 1959 Rorschach developmental level and social participation of chronic schizophrenics *Journal of Projective Techniques* 23, 87-92